

公民館講座の受講者における学習の諸相

田 中 雅 文
(日本女子大学)

1. はじめに

公民館事業のひとつの主流は、趣味・教養関係の講座といってよい。平成8年度「社会教育調査」をみても、公民館の学級・講座数のうち、「教養の向上（趣味・けいこごとを含む）」関係の構成比が59.4%を占めている。これらの学級・講座の多くは、生きがいや自己充足をねらいとし、しかもあらかじめ提供側で用意した学習内容を学ぶもの——いわば受け身的な学習——である。しかしながら、近年では、市民活動の活発化にともなって公的な講座の企画・運営への市民参画が重視され、一方で教育の公共性（公益性）が論じられるなかで学習成果の活用や社会的な諸課題の学習が重視される傾向が強い。このような潮流のもとで、受け身的で自己充足的な性格の強い趣味・教養関係の公民館講座の意義が、厳しく問われている。

これに対する回答は、ふたつの次元から可能である。

第一は、自己充足的な講座一般の意義を主張するための論理の展開である。例えば、佐藤晴雄による学習権の論理¹⁾、学習活動による健康増進が医療費などの削減を促すという山本恒夫の分析²⁾、文化創出という観点からみればむしろ現代的課題の学習への偏重こそが問題という浅井経子の警告³⁾などが参考となる。つまり、学習権保障、財政支出の削減効果、文化創出といった視点によれば、自己充足的な講座を公的な支出によって提供することには少なからぬ意義を主張することができる。

第二は、成人の学習が多様な学習機会を組み合わせながら発達するものであると考えた場合、その発達プロセスに果たす公民館の趣味・教養講座の役割が大きいことを立証することである。実際、基本的・入門的な内容を扱うことが多い公民館講座は、学習発達の初期段階を支える場として期待されやすい。趣味・教養関係の講座とはいえ、学習発達に一定の役割を果たしていることが証明されれば、その意義も認められる。

上記のうち前者は政策上の位置づけ、後者は学習発達の促進における役割を明確にすることによって、冒頭の問いに対する回答を提出しようとするものである。本研究は、このうち第二の方法によって、公民館の趣味・教養講座の意義を検討するものである。具体的には、アンケート調査をとおして、公民館における趣味・教養講座の受講者の特徴を分析し、それをふまえてこの種の講座が成人の学習発達に果たす役割を明らかにするとともに、今後の課題を考察することが、本研究の目的である。

2. 研究の枠組と方法

(1) 研究の枠組

本研究では、公民館での受講経験を期間（いつごろから公民館の講座を受講しはじめたか）と量（何講座ほど受講しているか）の側面から把握し、その組み合わせによって受講パターンを作る。一方、①日常の学習活動、②公民館以外の場での学習状況、③今後の学習意向という3つの側面から受講者の特性をとらえる（各特性の具体的な内容は3(2)で説明する）。本研究の基本的な課題は、上記の受講パターンとこの諸特性の関係を分析することである。

ただし、公民館での受講経験だけによって受講者の諸特性の違いを説明できるとはかぎらない。とくに、民間などの学習機会でも併行して学ぼうとする人は、そうでない人に比べて学習に対する前向きな姿勢をもちやすいかもしれない。そこで、行政の講座以外での学習にも注目し、これと日常の学習活動や今後の学習意向の関係を分析する。

いってみれば、上記のうち受講パターンは公民館の内部における学習状況

をあらわすので＜内部類型＞、行政の講座以外での学習活動は公民館とは別の場における学習状況なので＜外部類型＞と呼ぶことができる。本研究では、こうして内部類型に加えて外部類型からも受講者の特徴を分析し、それをおして公民館の趣味・教養講座の役割と課題を考察するものである。

なお上記の枠組は、過去・現在・将来という時間軸と、どのような学習機会を利用するかという空間軸を組み合わせ、成人の学習を分析しようとするものである。成人の学習を時間軸に沿って考察した例としては、成人の学習がどのような諸条件の連鎖（chain）によって発達するかをあらわすためにP.クロスが構築した、CORモデル（chain of response model）⁴⁾が有名である。ただし、彼女はこのモデルを用いた実証分析までは行っていない。日本では、藤岡英雄の「学習関心の階層モデル」⁵⁾、矢野真和の「学習のふくらみとちぢみ」⁶⁾が代表的である。藤岡と矢野は、アンケート調査を用いて、過去の学習経験が現在の学習の実現に正の影響をもつことを証明した。

しかし、以上はいずれも、学習機会をどのように組み合わせるかという空間軸への配慮に欠けている。時間軸と空間軸を合わせた先行的な実証研究はほとんど無く、かろうじて、松永由弥子が公民館と他施設の利用パターンを時系列的に分析した程度である⁷⁾。したがって本研究は、分析の方法論の開拓という点からみても、一定の役割を担えるものと考えらる。

(2) 研究の方法

本研究では川崎市を対象地域にとってアンケート調査を行った⁸⁾。川崎市では、制度上の公民館に相当するものを教育文化会館あるいは市民館と呼んでいる（以下、「市民館」と総称する）。これらの市民館では、本研究で焦点をあてる趣味・教養関係の講座群として、「成人学校」という事業を実施している。そこで、平成4年度川崎市成人学校の第2期受講者の全員を対象にアンケート調査を行った⁹⁾。調査方法は質問紙によるアンケート調査であり、講座出席時に配布し、郵送にて後日回収した。調査時期は、平成4年11月下旬～12月下旬である。配布数1,430票に対し、有効票回収数は618票（有効票回収率43.2%）であった。なお、有効票の属性構成は、性別では男性22.5%・女性75.9%、年齢別では39歳以下15.4%・40～59歳39.3%・60歳以上43.6%、職業別では有職（フルタイム就業）18.7%・主婦（パート）10.2%・主婦（専業）44.0%・無職21.8%である（無回答、不明、その他を除いて表

記したので合計が100%にならない)。

3. 受講パターンからみた学習の特徴

(1) 受講パターンの設定

はじめに、市民館の主催講座（以下「市民館講座」）の受講経験をみてみよう。市民館講座をはじめて受講した時期としては、「今回がはじめて」が35.8%と最も高い回答率である。以下、受講時期の新しい順に回答率をみていくと、平成3～4年（「今回がはじめて」の人を除く）12.8%，平成元～2年18.4%，昭和60～63年14.1%，昭和50～59年13.3%，昭和49年以前3.4%，無回答2.3%となっている。一方、最近受講した市民館講座の数をたずねたところ、「この講座のみ」が41.1%と多く、以下2講座19.4，3講座12.1%，4～5講座12.5%，6講座以上13.3%，無回答1.6%であった。

以上のように、市民館講座の受講経験をみると、期間的には短く、量的には少ない受講者が相対的に多いようである。

ここで、1年以上前に市民館講座を初受講した人を「ベテラン」、それ以外の人を「初心者」と呼んでみよう。調査時期からみて、1年以上前に初受講したことが確実な人は、はじめて受講した時期を平成2年以前と回答した人である。したがって分析上は、初受講の時期が平成2年以前の人を「ベテラン」、3年以降の人を「初心者」と呼ぶ。次に、最近の受講講座数が「この講座のみ」の人を限定型、複数の講座（2講座以上）を受講している人をマルチ型と名づける。

こうして受講経験を期間と量の側面から分類すると、市民館講座の受講者はマルチ・ベテラン、限定ベテラン、マルチ初心者、限定初心者という4類型に分けられる。各類型に含まれるサンプル数を、表1に示す。

このように設定した受講パターンと基本属性の関係は、表2に示すとおりである。マルチ・ベテランは高齢女性と主婦・無職、そして文化・レジャー活動とボランティア活動で活発な層に多い。この対極にあるのが限定初心者である。こちらは若い女性とフルタイム就業者、そして文化・レジャー活動とボランティア活動の活発でない層に多くなっている。年齢や職業状態から

みて、限定初心者には多忙な人が多いものと推察される。マルチ初心者は、高齢男性とパート主婦・無職、ボランティア活動が活発でない層に多い。

表1 市民館講座の受講パターン

		はじめて受講した時期	
		平成2年以前	平成3年以降
最近の受講講座数	2講座以上	マルチ・ベテラン:254人	マルチ初心者:94人
	この講座のみ	限定ベテラン:48人	限定初心者:206人

表2 市民館講座の受講パターン——属性別——

単位:%,()内は実数

		市民館講座の受講パターン				
		マルチ・ベテラン	限定ベテラン	マルチ初心者	限定初心者	合計(人数)
性・年齢 (** *)	女性・～39歳	20.9	4.7	10.5	64.0	100.0(86)
	女性・40～59歳	42.7	11.5	13.7	32.2	100.0(227)
	女性・60歳～	57.6	9.0	14.6	18.8	100.0(144)
	男性・60歳～	40.5	3.4	25.9	30.2	100.0(116)
職 業 (** *)	有職(フルタイム)	31.3	7.0	13.0	48.7	100.0(115)
	主婦(パート等)	40.3	9.7	19.4	30.6	100.0(62)
	主婦(専業)	46.2	8.3	11.7	33.7	100.0(264)
	無職	44.2	7.0	25.6	23.3	100.0(129)
生 活 (** *)	文化・レジャー(+)	44.4	7.5	16.0	32.1	100.0(468)
	文化・レジャー(－)	28.4	7.4	13.6	50.6	100.0(81)
生 活 (** *)	ボランティア(+)	53.3	6.7	10.0	30.0	100.0(150)
	ボランティア(－)	36.8	7.6	17.6	38.0	100.0(353)

注)(** *)はカイ2乗検定で1%水準で有意差あり。生活欄の(+)は「よくやっている」、(－)は「あまりやっていない」を表す。

(2) 諸特性との関係

① 日常の学習活動

さて、上記で設定した各類型と学習者の諸特性の関係をみてみよう。はじ

めに、日常の学習活動に注目する。本研究では、日常の学習活動をあらわす項目として、学習領域の多様性、学習の専門性、学習への積極性、学習成果の活用の4つを用意した。

多様性については、趣味関係（芸術、芸能を含む）、教養関係（歴史、文学、科学等）などの14領域から複数回答で最近学習したのものを選んでもらい、その選択数が多いほど学習領域の多様性が高いと考える。専門性とは、上記の14領域のなかで最も熱心に学習したものについて、そのレベルを答

表3 受講パターンと日常の学習活動の関係

単位:%、()内は実数

		市民館講座の受講パターン			
		マルチ・ベテラン	限定ベテラン	マルチ初心者	限定初心者
学習領域の多様性 (***)	1種類	26.1	40.5	28.9	41.4
	2種類	29.7	35.7	35.6	37.6
	3種類～	44.2	23.8	35.6	21.0
	合計	100.0(249)	100.0(42)	100.0(90)	100.0(181)
学習の専門性 (**)	入門程度	22.4	26.2	20.0	34.8
	やや高レベル	43.3	33.3	38.8	31.5
	かなり高レベル	13.1	19.0	18.8	19.0
	レベル関係なし	21.2	21.4	22.4	14.7
	合計	100.0(245)	100.0(42)	100.0(85)	100.0(184)
学習への積極性 (*)	なにより優先	7.1	4.3	8.7	3.9
	やや優先	38.5	29.8	34.8	30.4
	ほどほど／付合	54.4	66.0	54.3	65.2
	合計	100.0(252)	100.0(47)	100.0(92)	100.0(204)
学習成果の活用 (-)	している	47.8	43.3	39.7	48.8
	していない	52.2	56.7	60.3	51.2
	合計	100.0 (207)	100.0 (30)	100.0 (68)	100.0 (123)

注) カイ2乗検定で(***)は1%, (**)は5%, (*)は10%の水準で有意差あり。(-)は、とくに有意差が認められない。

えてもらったものである。積極性については、生活全体における学習活動の優先度が高いほど積極性が高いと考える。学習成果の活用とは、職業、アルバイト、ボランティア活動、作品発表、競技会など、学習した成果を社会的な場で活用したかどうかをあらわすものである。

サンプル全体では、多様性では約7割が2種類以上、3割が3種類以上学習しており、専門性では「やや（かなり）高い」が約5割を占め、学習成果の活用は約5割が経験している。積極性では「ほどほど（付き合い程度）」が約6割と半数以上を占める。日常の学習活動と受講パターンの関係を表3に示す。

まず学習領域の多様性では、3種類以上の領域を学習している人はマルチ・ベテラン（44.2%）に多く、マルチ初心者（35.6%）でも多い。逆に、1種類の人は限定ベテラン（40.5%）と限定初心者（41.4%）に多い。学習の専門性では、「やや高いレベル」がマルチ・ベテラン（43.3%）とマルチ初心者（38.8%）に多く、入門程度は限定初心者（34.8%）に多い。ただし、「かなり高いレベル」は、他の類型よりもむしろマルチ・ベテラン（13.1%）で若干少ない。学習への積極性をみると、「なにより（やや）優先」の割合は、やはりマルチ・ベテラン（合計45.6%）とマルチ初心者（同43.5%）で高くなっている。なお、学習成果の活用については、受講パターンとの顕著な関係を見出すことができない。

以上の結果から、マルチ型は限定型よりも学習領域の多様性、学習の専門性、学習への積極性がいずれも高いといってよい。学習領域の多様性では、とくにマルチ・ベテランの優位性が目立つ。一方、限定型のなかでも、受講経験の浅い限定初心者の場合は、学習の専門性がとくに低くなっている。

② 市民館以外の場での学習方法

次に、市民館以外の場における学習方法をみると、回答者の全体では次のような結果である（複数選択方式）。

自主的なサークル 30.4%，市民館以外の行政主催講座 28.1%，カルチャーセンター等 25.9%，本・テレビ・通信教育などでの独学 23.0%，個人教室・小教室 18.9%，大学・高校等の公開講座 9.9%，その他の学習機会 1.8%，「とくにしていない」 21.0%，（無回答） 4.7%

市民館講座の受講者の多くは、市民館だけでなく他の学習方法を併用して

いることがわかる。

上記の結果をもとに、市民館以外の場での学習方法に関するふたつの変数を設定した。ひとつは、「学習方法の多様性」であり、上記の学習方法のうち何種類を行っているかをあらわす。もうひとつは、「行政の講座以外での学習をしているか否か」であり、具体的には上記項目のうち、「市民館以外の行政主催講座」を除くいずれかで学習している人のすべてが、「している」に該当する。表4は、これらの変数と市民館講座の受講パターンの関係を示したものである。

表4 受講パターンと市民館以外での学習方法の関係

単位:%,()内は実数

		市民館講座の受講パターン			
		マルチ・ベテラン	限定ベテラン	マルチ初心者	限定初心者
学習方法の 多様性 (市民館以外) (** *)	な し	9.9	32.6	22.2	34.7
	1 種類	33.3	34.8	40.0	34.2
	2 種類	33.3	19.6	26.7	20.4
	3 種類～	23.5	13.0	11.1	10.7
	合計	100.0(243)	100.0(46)	100.0(90)	100.0(196)
行政の講座 以外での学習 (** *)	している	81.5	67.4	72.2	60.7
	していない	18.5	32.6	27.8	39.3
	合計	100.0(243)	100.0(46)	100.0(90)	100.0(196)

注) (** *) はカイ2乗検定で1%水準で有意差あり。

これによれば、マルチ・ベテランは他の類型に比べて、市民館以外での学習が活発とみてよい。学習方法の多様性では23.5%の人が3種類以上、行政の講座以外での学習については81.5%が「している」と回答し、他の類型に比べて高い比率である。これと対照的なのが限定型（とくに限定初心者）であり、学習方法の多様性が相対的に低く、行政の講座以外での学習をしていない人の割合が高くなっている。

③ 今後の学習意向

以上に述べたように、日常の学習活動と市民館以外での学習方法は、市民

館講座の受講パターンとの間に相関のあることがわかった。

ところが表5に示すように、学習継続の意欲については、受講パターンとの間に相関を見出すことができない。今後の学習意向については、学習継続の意欲の他に、希望する学習内容と学習の進め方をたずねた項目（項目の意味は表7を参照）があるものの、これらも市民館講座の受講パターンとの間に相関がみられない。市民館講座の受講者が将来の学習に前向きな態度をもつための条件として、ここで設定した受講パターンとは別の要因が潜んでいるようである。

表5 受講パターンと「今後の学習意向」の関係

単位:%, ()内は実数

		市民館講座の受講パターン			
		マルチ・ベテラン	限定ベテラン	マルチ初心者	限定初心者
学習継続の意欲	ぜひやりたい	34.0	31.9	26.6	29.6
	できればやりたい	32.4	31.9	30.9	36.0
	具体的でない	32.8	31.9	41.5	33.0
	やりたくない	0.8	4.3	1.1	1.5
	合計	100.0(249)	100.0(42)	100.0(90)	100.0(181)

4. 行政講座以外での学習の意味

(1) 学習方法パターンの設定

そこで次に、前節の(2)②で設定した変数のうち、「行政の講座以外での学習をしているか否か」に注目する。民間機関や高等教育機関、あるいは自主グループといった場での学習によって、行政講座では得られない刺激を受けることが、今後の学習意向に影響力をもつのではないかと考えたからである。さらに、行政の講座以外での学習に満足している場合には、今後の学習機会の選択でもそれらを重視するであろうし、そのような学習者は、より一層、今後の学習に前向きな態度をもちやすいと考えてよい。この仮説を立証するために、次のような分析を行う。

まず、今後の学習方法の希望について、複数選択方式でたずねた結果を下記に示す¹⁰⁾。

市民館の学級・講座 91.8%，市民館以外の行政主催講座 40.3%，自主的なサークル 33.3%，本・テレビ・通信教育などでの独学 21.5%，カルチャーセンター等 19.0%，大学・高校等の公開講座 19.0%，個人教室・小教室 16.1%，その他の学習機会 1.0%，（無回答）3.1%

受講した市民館講座に満足している傾向が強いのか、9割を超える人が市民館の学級・講座の受講を希望している。しかし、市民館やその他の行政主催の講座とは別の学習方法を望む人も決して少なくない。市民館講座の受講者は、今後においても多様な学習方法を考えているようである。

そこで、現在の学習方法で作成した変数と同じ考え方で、「行政の講座以外での学習を行いたいかな否か」——具体的には上記の「自主的なサークル」から「その他の学習機会」までのいずれかを希望したかな否か——でサンプルを2分する。このようにすれば、行政以外の学習機会に対する関心を、現在の実態と今後の意向の組み合わせによって、表6に示すような4つの類型でとらえることができる。

表6 行政の講座以外での学習：現在の実態と今後の意向の関係

		現在【行政の講座以外での学習】	
		している	していない
今後【行政の講座以外での学習】	したい	A類型：328人	C類型：80人
	したくない	B類型：84人	D類型：73人

表6によれば、A類型が圧倒的に多いものの、その他の類型にも一定数のサンプルが含まれることがわかる。本研究では、これらのA～Dの4類型をカテゴリーにもつ新しい変数を、学習方法パターンと呼ぶことにする。

なお、受講パターンの場合と同様、学習方法パターンと属性の関係をみると、職業との間には相関がない。年齢では、A類型とC類型は39歳以下の女性に多い。ただし、文化・レジャー活動では、A類型が活発な人に多いのに対し、C類型は不活発な人に多くなっている。その他、B類型は40歳以上の女性、D類型は60歳以上の男性に多い。

(2) 今後の学習意向との関係

上記のように設定した学習方法パターンは、市民館講座の受講パターンが識別できなかった今後の学習意向の違いを識別できるのだろうか。表7から探してみよう。なお、表には明記していないけれども、全サンプルの傾向は次のとおりである。学習継続の意欲では約7割が「ぜひ（できれば）やりたい」と、多くの受講者が前向きである。希望する学習内容では「両方」が約4割、学習の進め方では「幅広い学習」がやはり約4割を占める。

表7 学習方法パターンと今後の学習意向の関係

単位:%、()内は実数

		学習方法パターン			
		A 類型	B 類型	C 類型	D 類型
学習継続 の 意 欲 (** *)	ぜひやりたい	38.4	29.8	26.3	13.7
	できればやりたい	34.5	33.3	40.0	24.7
	具体的でない	27.1	36.9	33.8	61.6
	合計	100.0(328)	100.0(82)	100.0(80)	100.0(65)
希望する 学習内容 (** *)	この講座と同じ	29.5	48.8	37.5	47.7
	この講座と別	21.9	23.2	21.3	30.8
	両方	48.6	28.0	41.3	21.5
	合計	100.0(319)	100.0(82)	100.0(80)	100.0(65)
学習の 進め方 (** *)	幅広い学習	42.9	44.0	40.0	43.7
	専門性の向上	33.1	29.8	21.3	14.1
	楽しみで十分	21.8	25.0	38.8	40.8
	その他	2.1	1.2	—	1.4
	合計	100.0(326)	100.0(84)	100.0(80)	100.0(71)

注) (** *) はカイ 2 乗検定で 1%水準で有意差あり。

表7によれば、学習継続の意欲については、「ぜひやりたい」はA類型が38.4%で最高値、D類型が13.7%で最も低い。対照的に、「具体的でない」はD類型が61.6%と飛びぬけて高く、A類型が27.1%で最も低い回答率である。このように、現在・今後ともに行政以外の学習機会を指向するA類型に、学習継続の意欲を強くもつ人が多い。

次に、希望する学習の内容については、A類型（48.6%）とC類型

(41.3%)で「両方」の回答率が高い。これに対し、B類型は「この講座と同じ」(48.8%)の割合が高く、D類型は「この講座と同じ」(47.7%)と「この講座と別」(30.8%)の割合が相対的に高い。「両方」を学びたいとする回答が今後の学習への前向きな態度をあらわすのだと考えれば、「行政の講座以外での学習」を「現在行っている」という実態よりは「今後行いたい」という意向の方が、そうした態度に影響しやすいと考えられる。

同じ表7から、学習の進め方をたずねた結果をみると、A類型(33.1%)とB類型(29.8%)は「専門性の向上」、C類型(38.8%)とD類型(40.8%)は「楽しみで十分」という回答率が相対的に高い。楽しみよりも専門性の追求の方が前向きな学習意向をあらわすものと考え、A類型とB類型は他の類型よりも前向きな態度が強いといえる。専門性を求めるか、楽しみを追求するか、という点については、希望する学習内容の場合と逆に、行政の講座以外の学習に関する今後の意向よりも現在の実態の方が影響しやすいようである。

以上でみてきたように、市民館講座の受講パターンでは見出せなかった今後の学習意向に関する傾向の違いを、行政以外の学習機会に対する現在の実態と今後の意向の組み合わせによって識別できることがわかった。しかも、学習の内容ではA類型とC類型、学習の進め方ではA類型とB類型が近似した傾向であることが示すように、現在の実態と今後の意向を組み合わせることで識別力が向上した。表7にあらわれた結果を総合的に解釈すると、現在のみならず今後においても行政講座以外の学習機会を利用しようと考えている受講者(つまりA類型)こそが、相対的に前向きな学習意向をもちやすいと推察できる。こうして、本節の冒頭に提示した仮説を立証することができた。

なお、行政に対する要望をたずねた質問のなかに、興味深い結果があらわれている。「受講者の企画による講座をふやしてほしい」の回答率が、A類型16.8%、B類型12.5%、C類型6.3%、D類型4.2%(カイ2乗検定:1%水準で有意)となり、行政以外の学習機会に関心の強い人ほど高くなっているのである。行政以外の講座を経験することで、「受け身」学習から脱却して自ら企画の役割まで担おうという意識が芽生えやすいのかもしれない。

(3) 学習活動の連鎖に関する若干の分析

ここで、学習活動の連鎖に関する若干の分析を行ってみよう。表8は、市民館講座の受講パターンと現在における行政の講座以外での学習を組み合わせる8つの類型に細分化し、それぞれの類型ごとに行政の講座以外の学習を今後希望する人の割合を求めたものである。

表8 学習活動の連鎖：受講パターン、現在・今後の学習方法

市民館受講パターン	マルチ・ベテラン		限定ベテラン		マルチ初心者		限定初心者	
行政講座以外での学習(現在)	○	×	○	×	○	×	○	×
行政講座以外の希望率(今後)	78.9	36.6	82.1	57.1	84.1	52.0	78.4	61.4

注) ○は「している」、×は「していない」の意味。数字は%。

これによると、受講パターンの違いによらず、現在すでに行政の講座以外で学習している人は、今後における行政の講座以外での学習を希望する割合が概ね80%程度の高水準である(例えば、マルチ・ベテランの場合は78.9%)。これに対し、現在は行政の講座以外で学習していない人について、今後における行政の講座以外での学習希望率をみると、マルチ・ベテランだけは36.6%とかなり低く、他の3類型では概ね50~60%程度となっている。

この結果から解釈するかぎり、長期にわたる市民館講座の受講を経験したうえで現在も複数の講座を受講している受講者——つまりマルチ・ベテラン——が、もしも行政講座以外の学習機会を現在利用していないとすると、彼／彼女は今後も行政以外の学習機会に関心をもたず、行政の枠内で学習を続ける可能性が高いものと推察できる。

5. おわりに

以上の分析から得られた知見をまとめてみよう。

まず、全サンプルの回答結果によれば、学習に対する積極性の弱い受講者が多いとみられるものの、多くの受講者が市民館以外での学習も指向し、今後における学習継続の意欲も強い様子があらわれている。全体として、多様な学習機会を利用しながら、今後の学習にも意欲をもつ学習者像といえる。

受講パターンで分析した結果によれば、マルチ型では学習領域の多様性、

学習の専門性、学習への積極性が高い。とくにマルチ・ベテランは、学習領域や学習方法の面で多様性が高く、行政講座とは別の学習機会もよく利用している。公民館講座を受け続けるリピータに対する批判がしばしば聞かれるけれども、マルチ・ベテランのこうした特性からは、他の学習機会にも目が開かれて公民館講座との相乗効果で学習が総合的に発展する可能性を感じることができる。

しかし、受講パターンによる分析は将来の学習意向まで説明することができない。そこで行政の講座以外での学習について、現在の実態と今後の意向を組み合わせ、新しい変数として学習方法パターンを設定した。学習方法パターンを用いた分析によって、行政の講座以外の学習を指向する受講者が、今後の学習継続に対して前向きな態度をもつ傾向にあることを見出した。公民館の外部の学習機会も利用しようという姿勢が、新たな学習意欲の源泉となる可能性をみてとれる。

さらに、学習方法パターンを用いた分析から、ふたつの点を指摘できる。ひとつは、表8でみたように、行政講座以外の学習機会を利用していないマルチ・ベテランが、行政外の学習の場に将来出て行く可能性の低いことである。ここには、あくまでも行政講座に学習の場を求める一群のリピータが存在することを感じる。いまひとつは、行政以外の学習機会に強い関心をもつ受講者が、受講者の企画する講座に興味をもつ傾向の強いことである。行政外の場で併行して学ぶことが、「受け身」学習から脱却して自ら企画の役割まで担おうという意識につながるのだとしたら、これは貴重な発見である。

以上の知見をふまえて、公民館の趣味・教養講座の役割と課題を次のように提示することができる。

第一に、この種の講座が、現状において一定の役割を担っていることが確認できた。受講者全体でみれば、多様な学習機会を利用し、学習継続の意欲も強い。とくに、マルチ・ベテランや行政以外の学習機会に関心の強い受講者では、その特徴が強くあらわれる。学習発達に占める役割は、決して小さくないといってよい。

しかしながら、第二には、そのような役割が最大限に発揮される条件整備が重要である。行政以外の学習機会に関心の強い受講者が今後にも前向きの学習意向をもつことをふまえれば、行政外の学習機会と公民館講座の接続性を

強める必要がある。すでに普及した学習メニュー方式や生涯大学システムのような仕組、あるいは岡本包治の提唱する「公民館事業の構造化」による公民館内外の事業との接続性の強化¹¹⁾、笹井宏益のいう「専門的な体系」構築のための高等教育機関等との連携¹²⁾など、さまざまな可能性が広がっている。公民館講座を単体でとらえるのではなく、総合的なシステムの要素として生かす努力をすることで、今回の分析にあらわれたマルチ・ベテランや行政以外の学習機会に関心の強い受講者の利点が脹らむものとする。そして、公民館講座に学習の場を求め続けるリピーターでなく、多様な学習方法の相乗効果によって学習を発達させられる学習者を育てるべきである。

第三に、行政以外の学習機会に関心の強い受講者が講座企画に興味をもちやすいことは、受け身的な性格の強い公民館講座を住民参画の仕組にまで高める好条件である。住民の企画・運営による講座が近年は注目されているけれども、「公民館での受け身的な学習→行政外の学習への広がり→公民館講座の企画に参加」というプロセスによって、そのような仕組を拡充させることが可能である。「受け身的な学習者から主体的な企画スタッフへ」という成長の支援も、公民館講座の役割を考えるうえで重要な視点であるとする。

【注・引用文献】

- 1) 佐藤晴雄「社会教育における「社会還元論」の批判的考察—学習権保障の観点から—」(『日本生涯教育学会年報』第9号, 1988)
- 2) 山本恒夫「提言」(国立教育会館社会教育研修所『高齢者の学習・社会参加活動の国際比較』1997)
- 3) 浅井経子「学習希望率, 学習内容, 方法・形態別ニーズの変化と学習機会の整備」(『日本生涯教育学会年報』第18号, 1997) p.55
- 4) Cross, K.P., *Adults as Learners*. San Francisco: Jossey-Bass, 1981
- 5) 藤岡英雄「学習関心の階層モデル—学習ニーズ把握の新しい枠組みとその有効性について—」(『日本生涯教育学会年報』第7号, 1986)
- 6) 矢野眞和「生涯学習における参加と不参加の構造—学習希望は顕在化するか—」(広島大学大学教育研究センター『大学論集』第12号, 1983)
- 7) 角替(松永)由弥子「公民館利用者の学習継続性に関する研究—静岡県清水市の場合—」(『東海女子大学紀要』第13号, 1994)
- 8) この調査は、筆者が参加した(財)川崎市生涯学習振興事業団及び川崎市教育委員

146 自由研究

会の委託事業「市民館利用者の学習実態に関する調査」(平成4年度事業, 代表: 原芳男)である。本研究で用いるデータは, 調査実施からかなり年数を経ているものの, 今日の公民館講座の役割を考えるための分析データとしては, 現時点でも有効であると考えている。

- 9) ただし, 体育施設での講座(スポーツ関係), および後述の調査期間より前に終了した講座の受講者は除外した。
- 10) この質問は, 今後何らかの学習を行いたいとする人のみ(610人)を対象としている。
- 11) 岡本包治「公民館の自己点検」((社)全国公民館連合会『月刊公民館』3月号, 2000) p.7
- 12) 笹井宏益「「学習の高度化」とは何か」((社)全国公民館連合会『月刊公民館』10月号, 1997) p.9